

入学前課題と保育者養成に関する研究 ～ピアノ教材の提示～

溝口 綾子

帝京短期大学

Study on problem and childminder training before entrance to school
~Presentation of piano teaching material~

Ayako Mizoguchi

Teikyou Junior College

要 旨

保育者を目指す入学生に入学前課題としてピアノ教材を提示した。それは、入学前に予め学習して入学後の学びに生かすことができるようにするためである。この課題を実行した学生は9割に達し、ピアノの基礎技能の習得率は平均して6割であった。このピアノ技能は、前期終了時にはわずかながら有意を示している。それは、授業者が学生個々の進捗とレベルに合わせてピアノ教材を選曲し練習方法をわかりやすく教授して学生が実践の場で自信をもって音楽表現活動に取り組めるようになることを目標としているからである。しかし、後期初めの幼稚園教育実習では、音楽表現活動の機会を与えられても十分に力を発揮されていない。これは入学時から半年間の習得力量と実習開始までの練習時間の不足によるものと考えられる。

保育者のピアノ伴奏は、うたっている子どもの呼吸に合わせるためのものであり、歌をうたう主体は子どもである。保育で使うピアノは高い技能を求めているのではないが、それでも一定のレベルは獲得しなければならない。そのレベルとは、子どもとのかかわりの中で子どもの姿に目を配りながら余裕をもってピアノ伴奏できるようにすることが一つの目安であろう。

保育者に必要な音楽表現力は、音楽を感じる心、子どもと音楽を楽しむ心、そして音楽的な体験によって豊かな感性を養うことで培われる。

キーワード：入学前課題、ピアノ教材、保育者養成

Abstract

Entrance to school to be a childminder was raw and showed the piano teaching materials as a problem before entrance to school. The student who carried out this problem reached 90% and the acquisition of the foundation of piano skill was 60% on the average. This piano skill advances at the time of the end just a little in first half year. A parson of class matches this with the degree of progress and the level of the student individual , and it selects music, and it is easy to understand an exercise method ,and it teaches the piano teaching materials, and this is because a student came to the music expression activity with the goal of becoming able to wrestle with confidence at a place of the practice. However, power is not shown enough even if I am given an opportunity of the music expression by the kindergarten student teaching of the latter team beginning. This is because there is not the exercise time that is enough by an acquisition ability and a training start of a half year after entrance to school. The piano to use by childcare does not find a high skill. But still must acquire the constant level. With the level, it will be one aim in the relation with the child to allow you to accompany a piano with margin while keeping a close eye on the figure of the child. The music power of expression necessary for a childminder is cultivated with a heart , child feeling music by a heart and a musical experience to enjoy music by feeding rich sensitivity.

Keywords : Problem before entrance to school. The piano teaching materials. The childminder training.

1. はじめに

本学のこども教育学科においては近年、保育者を志望して入学してくる学生の気質や能力に変化がみられる中で、鍵盤楽器初心者の入学生は著しい増加傾向にある。そのため、入学後に保育技能として身に付けることの難しい学生が多くみられる。本学こども教育学科の入学生は、幼稚園教諭および保育士資格取得を目標としている。その目標を達成するために、ピアノ実技については入学前に予め学習して入学後の学びに生かすことができるようにしたいと考えている。そこで、入学までに時間的な余裕のある推薦入試で合格した学生を対象に、平成24年度入学生から入学前課題としてピアノ教材を提示し、入学直後から始まる授業に意欲的に取り組み、基礎技能を身に付けられるようにしたいと実践している。

幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「表現」には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」また、2の内容(6)には「音楽に親しみ、歌をうたったり簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」¹⁾と示されている。この趣旨を生かし、幼稚園や保育所での音楽表現活動を充実させるためには、保育者養成において音楽的な感性や音楽技能を着実に身に付けることが必至と考える。また、保育の現場においては音楽表現活動の際にピアノを使う機会が多く、ピアノ技能のある保育者を求めている実情も考えなくてはならない。

ピアノはオーケストラに匹敵する機能を持ち合わせている楽器といわれている。すなわち、低音から高音、弱音から強音、いくつかの音を同時に鳴らす(和音)など多彩な機能を持っている楽器である。このような楽器を使いこなすためには、様々な練習と経験の積み重ねが必要となる。しかし、入学前課題を実行するにあたってそこまでの高い技能を目標として求めているのではない。入学前にピアノ教材を課題として提示されたから練習を始めたという動機であっても、ピアノの鍵盤に触れる魅力を感じその楽しさを体得してほしいと考えている。本研究では、入学前課題の実践結果の分析を通して、今後の保育者養成における音楽技能の教育について検討し、さらなる充実した音楽表現活動の実践につなげていくものとした。

2. 研究の目的

学生は、入学前課題(ピアノ教材)をどの程度実践し、入学後の授業にどのような影響や効果がみられるかを明らかにする。その上で、授業者(複数人)は授

業を効果的に進めるためにどのような指導法で行っているかその様態を明らかにする。また、前期に習得した音楽技能を後期初めの教育実習でどのように生かされているかを明らかにする。

3. 研究の方法

調査期間は、平成25年4月から10月まで行う。対象は本学こども教育学科1年生63名のうち推薦入学生48名である。入学直後の第一講目の授業において個々の学生について、課題実践の有無を調査し、その技能や学習状況を把握する。それを基に授業者(複数人)は、担当学生への楽曲の選択や授業の仕方をどのように行っているかを質問紙調査及び聞き取り調査する。さらに、学生の習得した音楽技能は後期初めの教育実習にどのように生かされているかを質問紙調査を行う。また、担当教員のみでの評価だけではなく、複数の教員によって授業開始から半年ごと(前期・後期)に実技試験を行い、音楽基礎技能の習得状況を把握する。

4. 結果と考察

(1) 入学前課題と実践状況

推薦入試合格者48名に入学前課題として、誰もが歌ったことのある歌6曲を選定し、ピアノの初歩伴奏の楽譜を送付した。(文末に資料として1曲を添附する)

本学のピアノ実技の授業は、1学年2コマを5人の授業者が担当している。1コマ90分を学生1人あたり15分のレッスンで6人担当することになる。すなわち、1年生全員を5人の授業者が2コマで12人を担当していることになる。5人の授業者には、入学前課題を提示された学生について入学後の最初の授業でその成果を確認してもらった。〈表1〉はその結果である。歌の選択は2曲以上と提示しているため、全員が全曲練習しているわけではない。課題を実行したかどうかの問いに回答者48人中、46人(95%)が実行したとしている。実行しなかったのは2人であった。練習した歌(曲)についての表中の人数は、その歌(曲)を選択して練習した学生の人数となっている。

課題を実行しての成果については、ほぼ達成している(A評価)の人数を回答している。それぞれの授業者は、8割以上の学生が「楽譜が読める(鍵盤の位置がわかる)」と回答している。また、6割以上の学生は「指使いについてはかなり正確である」となっている。さらに、5割強の学生は「拍子やリズムが正しい」という結果で、これは課題とした歌が良く知られ

<表1>入学前課題の調査

回答数(48人)

入学前課題	実行した(練習した)	46人(95%)
	実行しない(練習しない)	2人(4%)
練習した歌(曲) (複数回答可)	バイエル	11人(23%)
	ちょうちょう	39人(81%)
	むすんでひらいて	25人(52%)
	きらきら星	30人(62%)
	ゆうやくこやけ	17人(35%)
	大きな栗の木の下で	21人(44%)
	ぶんぶんぶん	33人(69%)
課題を実行した成果 (複数回答可)	楽譜が読める(鍵盤の位置がわかる)	41人(86%)
	指使いはかなり正確	32人(66%)
	拍子やリズムが正しい	26人(52%)
	速度が正しい	14人(29%)
	強弱・曲想をつける	10人(20%)
練習状況	大変良くしている	38人(79%)
	あまりしていない	9人(19%)
	全くしていない	1人(2%)
授業態度	意欲的、積極的に受講している	33人(69%)
	まあまあふつうに受講している	13人(27%)
	全く上達しようという意思がない	2人(4%)

ているから自然に身に付いていることが考えられる。練習の状況については8割弱の学生が「大変良く練習している」という評価である。授業態度については7割弱が意欲的、積極的に受講しているという回答である。これらの結果は、個々の学生が入学前課題としてピアノ教材を提示された意味を理解して課題のみを繰り返し練習したことと、学生一人につき一人の教員という個人対応授業の特殊性が要因であろうと推察する。一方、課題を全く練習しなかった学生(2人)は、授業開始時から音楽に対する感性や知識に乏しく、全く上達しようという意思がない状況である。これらの学生については、15分という個人対応授業の中で特にピアノ教材の選曲に配慮し、まずは基礎技能習得より音楽を楽しむ感性を育てる指導を優先していくことを再確認した。

(2) ピアノ実技の授業

4月授業開始前の入学当初のオリエンテーションにおいて、ピアノの経験の有無を調査したところ、推薦入試合格者48名中27名は経験ありとしている。しかし、経験者であっても幼稚園から小学校の頃に経験したとしている学生が13名で半数を占め、それ以後ほとんどピアノに触れていないため、初心者に近いといえる。また、全くピアノの経験のない学生は21名いるため、入学生の7割は初心者としての指導が必要で

あることが分かった。

本学では、ピアノ実技の授業は週1回15コマを前後期通年で開設している。以下は1年次前期のシラバスにある授業のテーマと到達目標である。²⁾

- ・乳幼児の保育の中に楽しい音楽体験を取り入れることは非常に大切である。それを実践するためには、音楽に関する基本的な知識や技能を身に付けて音楽表現できることが前提となる。そのため本授業では、保育現場で必要となる基本的なピアノの演奏技術と歌唱(視唱・弾き歌い)の習得を目標とする。
- ・テキスト①「教職課程のための大学ピアノ教本」②「保育のうた・こどものうた120」の2つを併用する。
- ・基礎テクニック(1)読譜力を付ける(楽譜を読むための基本的な知識・鍵盤の位置)
- ・基礎テクニック(2)指使い・リズム・速度の習得
- ・応用テクニック(1)入学前課題全曲の歌・伴奏を習得する。
- ・応用テクニック(2)教育実習オリエンテーションで提示された歌と伴奏を習得する。

応用テクニック（３）強弱・速度・曲想を意識する。
 応用テクニック（４）主要三和音をもとに伴奏パターンを変える。

このシラバスは個々の学生が授業のテーマと到達目標を明確にして受講するために作成している。また、学習上のアドバイスとしては、「ピアノのテクニックは正しく楽譜を読み取り、日々の練習を積み重ねる努力により、徐々に身に付く能力であるため、履修に際しては少なくとも授業時間の5～6倍の練習が必要である」²⁾と明記している。しかし、授業は出席するが日々の練習を実行する学生はあまり多くないのが現状である。また、入学時の学生のピアノ技能には大きな個人差があり、達成に向けていくためには、個々の学生の努力は当然のことながら、個人差に応じた授業者の熱意と根気が必要である。ピアノの基礎技能の基盤となるテキスト①「教職課程のための大学ピアノ教本」は、一般的に使われている「バイエル教則本」をベースにして教員免許取得を目指す学生のために編集されたテキストである。また、テキスト②「保育のうた・こどものうた120」は幼稚園や保育園でよく歌

われている「園生活の歌」「季節の歌」などの簡易伴奏集である。＜表2＞は、それぞれの時期までにマスターしてほしい到達目安を示している。

1年次のピアノ実技におけるテキスト①の50番までは、ピアノの基礎であるハ長調、ト長調、ヘ長調の主和音、下屬和音、属和音や4拍子、3拍子のリズムを中心とした基本的な内容となっているため、着実にテクニックをマスターすることが大事である。授業者はテキスト①の習得レベルに合わせてテキスト②「保育のうた・こどものうた120」を選曲し、練習方法をわかりやすく授業を行っている。具体的にはリズム（4拍子・3拍子）、速度（Andante～ゆっくり歩くような速さで Moderato～中くらいの速さで Allegro～速く）旋律、強弱（f～強く mf～少し強く p～弱く mp～少し弱く）、曲想（comodo～気楽に dolce～甘くやわらかに）、音階（長音階・短音階）、調（ハ長調・ヘ長調・ト長調・ニ長調・イ短調）などの音楽要素と、読譜力や指使いなどの技能面と関連付けながら授業を行っている。こうした過程においてテキスト①を終了している学生にはテキスト②よりやや難度の高い原曲の伴奏を提示する場合もある。

＜表2＞ピアノ実技の到達目安

	テキスト①の到達目安	テキスト②の到達目安
1年次	50番（ハ長調、ト長調、ヘ長調の主和音、下屬、属和音・分散和音・4拍子、3拍子）	入学前課題・メリーさんのひつじ・こいのぼり・まつぼっくり・とんぼのめがね など
2年次	70番（ハ長調、ヘ長調、ト長調の音階付点音符・十六分音符のリズム）	犬のおまわりさん・やきいもグーチーパー 南の国のハメハメハ大王・ゆき など
3年次（専攻科）	90番以上（臨時記号・6度、3度の重音 イ短調、ニ長調の和音・装飾音符）	山の音楽家・たのしいね・ハッピーチルドレン・ビリーブ・さんぽ・森のくまさん など

（3）教育実習における実態

本学こども教育学科では、幼稚園教諭2種免許取得に向けて1年次と2年次に2週間ずつ計4週間の幼稚園教育実習を設定している。実習先の幼稚園への実習依頼の際には1年次なので、観察実習を中心にできれば部分実習の機会もお願いしている。これに関して昨年までの実習生の例で述べると、幼稚園によってはオリエンテーション時に楽譜を提示され、練習してくるように言われる場合もある。しかし、初心者の学生にとって入学して半年の授業では弾きこなすことは大変困難である。中でも“園歌”は学生にとっては初めて聞く歌が多いため、メロディーと歌詞を覚えるのが精一杯で、ピアノ伴奏を付けるのはかなり難しいという実状がある。本年度も昨年と同様の状況が見られたため、授業者としては少しでもこれらを克服して実習に

臨んでほしいという願いがある。そこで、伴奏部分の主要三和音の構成音の中からメロディーに合う音をピックアップするという奏法、つまり、左手の伴奏を単音にして右手のメロディーに合わせるという奏法をアドバイスしている。学生はこの奏法で伴奏する旨を実習園に伝え実習に備えている。

本年度の幼稚園教育実習における音楽表現活動の実践状況を把握するために、実習の終了時に実習を行った45名に質問紙調査を行った。その結果は＜表3＞に示すとおりである。

例年のように初めての幼稚園教育実習といえども音楽表現活動を部分実習として機会を与えられた学生は4割を超えている。そのうちの半数以上が＜表3＞にあるように歌だけの活動を行ったとなっている。この歌には「グーチョキーパー」などの手遊び（歌いなが

ら動作する)は含まれていない。また、学生の意見にあるように「入学前課題の練習が実習で役に立った」という4割強の学生は「簡単な歌なので歌えて(弾けて)よかった」とその効果を実感している。それは、実習中に体験した歌やピアノ伴奏が入学前課題と同レベルであったからと考える。さらに、「繰り返しの練習の大切さが分かった」という学生は、練習すれば弾けるようになることを実感したと思われる。実習園側としては、はじめて実習を行う学生の部分実習として“歌をうたう”“手遊びをする”“ピアノ伴奏をする”という音楽表現活動は実習生にとって他の活動より取り組みやすいと考えてその機会を与えてくださっているのであろう。「入学前課題は役にたっていない」という学生(6人)は、前期の授業において「あまり練習していない」(9人)学生であり、実習中も「音楽表現活動の機会がなかった」(5人)学生である。しかしながら保育の場においては、“歌をうたう”ことは日常的に行われているので、実習生は実習園の音楽的な環境に馴染み、子どもたちと一緒に楽しむためにも、入学前課題の“こどもの歌”全6曲を実習前の授業でマスターする努力が必要と考える。

神原・鈴木(2011)は「子どもたちが音楽を体験

する環境は、保育者の態度(価値観)に依存している。幼児の音楽的発達、幼児が大人と一緒に楽しい音楽的経験に参加する多くの機会を与えられて高められる³⁾という。実習生といえども実習中は保育者である。子どもたちの音楽的環境を作り出す一翼を担っている保育者として少なくとも子どもと音楽を楽しむ姿勢は必至である。

授業者たちは、多くの学生たちが幅広い音楽ジャンルの中で日常を過ごしていることを知ってはいるが、保育者に必要な音楽性についてはピアノ実技を通して体得してほしいと考えている。入学当初の入学前課題を2曲以上練習した学生は9割を超えるという結果を踏まえつつ、まだ習得できていない課題曲についても実習前の前期中にマスターできるようその内容を精選している。たとえば、資料として添付した楽譜(ゆうやけこやけ)では、右手のメロディーに合うように、左手は主要三和音である構成音のうち二音の和音で各小節の1拍目に入れるという簡単な奏法になっている。課題6曲をマスターした学生には、これと同レベルの曲を選曲し弾き歌いを楽しみながら練習できるように授業を行っている。

<表3>幼稚園教育実習における音楽表現活動

回答数(45人)

音楽表現活動の部分実習の機会	あった(20人) なかった(25人)
活動の内容(複数回答可)	歌だけ(12人) ピアノ伴奏だけ(3人) 弾き歌い(5人) 手遊び(6人) リトミック(3人)
楽譜の提示	実習前に渡された(11人) ~3曲(2人) 2曲(5人) 1曲(4人) 実習前も実習中も渡されない(9人)
事前の練習	練習した(9人) 練習しない(11人)
実習でうたった歌名(複数回答可)	お弁当の歌(6人) お帰りの歌(6人) おはようの歌(5人) 手遊び歌(4人) トンボのメガネ(3人) うんどうかい(3人) 園歌(2人) のの様の歌(1人) 仏様の歌(1人) 線路は続くよどこまでも(1人)
入学前課題と実習についての意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入学前課題の練習が実習で役に立った(19人) ・ 簡単な歌なので歌えて(弾けて)よかった(11人) ・ 繰り返しの練習は大切であることが分かった(8人) ・ 入学前課題は自分にとって役に立っていない(6人) ・ 歌の伴奏はかなり簡単だったので物足りなかった(2人) ・ ピアノに触れる機会が増えた(1人) ・ 入学前に練習できてよかった(1人) ・ 子どもの歌を弾けるようになってうれしい(1人)

(4) 音楽基礎技能の習得状況

次の<表4>は、前期最終週の実技試験の際に試験官として採点した3人の授業者の評価と、前期の5人の授業者が、担当している学生の前期終了時の到達目標についての評価及び聞き取り調査を総合して表したものである。

授業者1～5は、1コマ6人平均の学生を担当している。<表4>は、入学前課題について<表1>に示した推薦入学の48名について、前期終了時の基礎能力(読譜力、指使い、リズム、速度)、入学前課題、実習園提示曲の達成度、強弱・曲想、伴奏パターンの7項目について評価したものである。読譜力は、入学時のA評価41名から42名へ、指使いはA評価32名から33名へ、リズム、速度は26名から27名へといずれもわずかながら増えている。入学前課題(6曲)は入学時にほぼ達成しているA評価38名は42名となり、大体達成しているB評価は6名となっている。入学時にあまり練習していないとしていた9名は、A評価(3名)とB評価(6名)とプラスに変容している。入学時に全く練習していない1名は終了時もあまりできていないというC評価となっている。<表3>に示したように幼稚園教育実習において音楽表現活動の機会があったとしている20名のうち、事前に譜面を提示されたのは11名である。そのうち練習したのは9名であった。実習園の提示曲については、A評価は4名、B評価は3名、C評価は1名となっており、全体の7割強の達成度である。実習中にピアノ伴奏する機会があった学生は8名(伴奏のみ3名、弾き歌い5

名)となっているが、実習園から譜面を提示されてもされなくても実習前の授業において、授業者は実習中音楽表現活動を体験することを予測して、入学前課題曲の全6曲と同レベルのピアノ伴奏をマスターできるよう“こどもの歌”の選曲を行い、授業を進めることが重要となる。強弱・曲想を付けることについてはA評価は11名、B評価は24名、C評価は13名となっている。これはその曲についての理解度と練習量なくして短期間で身に付けることは大変難しいと考える。さらに、伴奏パターンを変えて演奏するテクニックは、まずメロディーを聴き取って即座に和音をつけられる能力が必至であるため、十分な聴音力と練習量が必要となる。この和音をつけるという伴奏部分の奏法は、三和音を分散させる奏法(分散型)や、三和音を低い音または高い音から順番に弾く奏法(アルペジオ型)などがあり、これらを臨機に弾きこなす能力があるということである。この伴奏パターンを変化させることについては1名(B評価)を除いて多くの学生が習得できていない。この1名はピアノ経験は長く、基礎的スキルは十分に習得していて初見のきく技量のある学生である。他の学生については半年間の音楽基礎技能の習得状況から判断すると、楽譜通りに弾くことが優先されてもやむを得ないと考える。つまり、この時点で実習を迎える前期終了時の学生に必要なのは、このような伴奏パターンを身に付けることや名曲を弾けるようになることより、保育の中で子どもたちと楽しく歌をうたいながら簡単な伴奏を付ける力を養うことが大切であろう。

<表4> 前期終了時の習得状況

	授業者1	授業者2	授業者3	授業者4	授業者5
読譜力	A(8人) B(1人) C(1人)	A(9人) B(1人)	A(8人) B(1人)	A(9人)	A(8人) B(1人) C(1人)
指使い	A(6人) B(1人) C(1人)	A(7人) B(1人) C(2人)	A(7人) B(2人)	A(6人) B(3人)	A(7人) B(1人) C(2人)
リズム・速度	A(6人) C(4人)	A(6人) B(2人) C(2人)	A(5人) B(2人) C(2人)	A(4人) B(3人) C(2人)	A(6人) B(3人) C(1人)
入学前課題曲 達成度	A(8人) B(2人)	A(9人) B(1人)	A(8人) B(1人)	A(7人) B(1人) C(1人)	A(9人) B(1人)
実習園提示曲 達成度	B(1人)	A(2人)	A(2人)	B(1人) C(2人)	B(1人)
強弱・曲想	A(3人) B(4人) C(3人)	A(3人) B(5人) C(2人)	A(2人) B(5人) C(2人)	A(1人) B(5人) C(3人)	A(2人) B(5人) C(3人)
伴奏パターン	C(10人)	c(10人)	c(9人)	B(1人) c(8人)	C(10人)
評価：A・・・ほぼ達成している(80~90%) B・・・大体達成している(60~70%) C・・・あまりできていない(50%以下)	担当学生数(推薦入学生)： 授業者1(10名) 授業者2(10名) 授業者3(9名) 授業者4(9名) 授業者5(10名)				

5. まとめと今後の課題

推薦入学生は、合格発表から入学するまで4か月ほどある。この期間にピアノ初心者は少しでもピアノの授業を意欲的に進められるように入学前課題を提示している。すなわち、入学前課題として大方の人が知っている“こどもの歌”に初心者でも練習次第で弾けるようになる簡単な伴奏の楽譜を6曲を提示した。これを実行した学生は9割以上であった。この実行した学生について授業者は、8割以上の学生に読譜力があり、5割以上が指使いの正確さやリズム感もあると評価している。これらの状況は半年後の前期終了時にはわずかながら有意に変容している。それは、推薦入学生の多くは、入学前課題について真剣に取り組んだ結果であり、授業者たちは個々の学生のレベルや進度を第一に授業を行い、入学前課題曲に代表される“こどもの歌”とそのピアノ伴奏の繰り返しの練習を促し、マスターできるよう指導を進めてきたからであるといえよう。しかし、後期初めの幼稚園教育実習では、音楽表現活動の機会を与えられても十分に力を発揮することはできていない。これは、事前に提示された譜面が実習開始前の2週間前後に行われる実習オリエンテーションで渡されることが多く、学生自身の練習時間も取れなかったり、授業のコマも実習開始までに1～2コマで指導も十分でなかったりしたことが要因と考える。

子どもたちは、音楽を聴いて歌ったり踊ったりすることが大好きである。それは、子どもたちの心の解放であり自己表現の一つである。さらに、うたう活動は表現の基礎であり、最も早く表れる音楽表現活動である。この音楽表現活動ではピアノ伴奏やCDの使われることが多い。CDは音楽の専門家によって作成されているため、それぞれの園においては表現活動の内容によって様々な使い方をしている。例えば、食事のBGMとして流したり、新しい歌を覚える際に聴いたり、時には子ども自身がCDを操作して集中して音楽を聴いたりする。歌の伴奏という側面から捉えたとCDは何回聴いても同じ演奏である。子どもたちはそのCDに合わせて歌うことになる。しかし、保育者の生のピアノ伴奏は子どもの反応を読み取りながら、時にはテンポやリズムを変えたり強弱をつけたりすることが可能である。保育者のピアノ伴奏は、うたっている子どもの呼吸に合わせるためのものであり、歌をうたう主体は子どもなのである。4の(4)でも触れているが、保育で使うピアノは難しい名曲を弾くことが求められているわけではないし、高い技能レベルを求めているのでもないが、それでもある一定のレベルは獲得しなければならないと考える。そのレベルとは、子

どもたちと音楽表現活動をする中で、子どもの姿(動き)に目を配りながらも余裕をもってピアノ伴奏をできることが一つの目安と考えてよいだろう。しかし、生のピアノ伴奏が子どもたちの音楽表現活動に絶対必要ということではない。日常的に行われている手遊びや伝承的なわらべ歌などは無伴奏でも打楽器を使っても十分に楽しむことができる。ピアノ伴奏は子どもたちの音楽表現活動に使われる一つの方法であると捉えたい。

実習を終えた学生は、幼稚園での音楽表現活動にピアノが多く使われている現状に、「もっとピアノの技能を高めたい」「ピアノを自由に弾きこなせるようになりたい」などと再認識して戻ってくる。

保育でのピアノの役割について石井(2012)は「ピアノという楽器を使いこなすには、多義にわたる様々な練習や経験の蓄積が確かに必要になる。しかし、的確にポイントをおさえる“質”を重視した練習方法によって技術は高めることができる。ひいてはそれが音楽活動にとどまらない保育そのものの幅を広げることにつながり、ピアノは保育者にとって強い味方になる」⁴⁾という。保育を目指す学生にとって大切なことは、ピアノの基礎技能を基盤とした音楽表現のためのテクニックの学習につける。ピアノ伴奏でいえば、楽譜どおりに指を動かすことのみならず“こどもの歌”を自分で感じ、イメージしたことをピアノの音で表現することである。保育者に必要な音楽表現力は音楽を感じる心、子どもたちと音楽表現活動を共に楽しむ心、そして、様々な音楽的な体験をすることによって豊かな感性を養うことで培われる。保育者養成において保育の知識やテクニックを学習することは基本であるが、ピアノ実技の授業では一定レベルの技能を習得させるとともに、保育者としての音楽的感性を高められるような教育的配慮の下に教授していく授業者の姿勢が重要と考える。

<謝辞>

ピアノ実技に関する質問紙調査及び聞き取り調査にご協力いただきましたピアノ講師の先生方に深く感謝申し上げます。

<参考文献・引用文献>

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」フレーベル館 2008年 11～12ページ
- 2) 帝京短期大学「平成25年度講義要綱」41ページ
- 3) 神原雅之・鈴木恵津子編著「幼児のための音楽教育」教育芸術社 2014年 13ページ
- 4) 石井玲子編著「実践しながら学ぶ子どもの音楽表現」保育出版社 2012年 168～169ページ

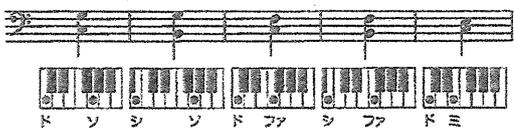
- 5) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
2008年 44～48 168ページ
- 6) 桶谷弘美・吉良武志・熊谷新次郎・斉藤正義・杉
江正美・高橋悦枝共著「音楽表現の理論と実際」
音楽之友社 2010年 26～32ページ
- 7) 大山美和子編「楽器奏法の基礎指導」音楽教育研
究協会 2006年 6～14ページ
- 8) 相澤保正・伊藤嘉子・木村博子・児玉裕子・澤田

- 直子・田中常雄・松原靖子・吉野幸男編著「あた
らしい音楽表現」音楽之友社 2008年
- 9) 有本真紀・阪井恵・山下薫子編著「小学校音楽科
教育法」教育芸術社 2011年 61～64ページ
- 10) 鈴木みゆき・藪中征代編著「乳幼児の音楽」樹村
房 2005年 9～48ページ
- 11) 谷口高士著「音楽と感情」北大路書房 2007年
2～23ページ

夕焼け小焼け

作詞：中村雉雄 作曲：津川信

(この曲に出てくる和音)



Moderato (きれいに、きもちをこめて)

ソ

(1) ゆう や け こ や け で ひ が く れ て は
(2) こ ど も が か え っ た あ と か ら

ソ D

3 1 2

や ま あ の い お お ら の な か ね が な る ま
お お き な お つ き さ

ソ D F#m D F#m D F#m D

4

お こ と り が つ な い で み な る か え る は
お と り が つ な い で み な る か え る は

F#m D F#m D F#m D

5 1 2

か そ ら す と は い っ し ゃ に か え り ま し ょ う
か そ ら す と は い っ し ゃ に か え り ま し ょ う

F#m D F#m D F#m D